小児看護 12 月号　第 46 巻第 12 号（通巻第 588 号）　2023 年 12 月 15 日発行（毎月 1 回 15 日発行）
ISSN 0386-6289

小児看護 12

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.46 No.12 DECEMBER
2023

腎臓病をもつ子どもへの看護

成人移行を見据えたケアを実践しよう

最終回

離島で釣りして，看護して

自分の全てで人と向き合う

へるす出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第30回 輝きの生まれるところ

今から7年ほど前。私は左手に買い物袋を提げ，右手でベビーカーを押したまま，エレベーター前で立ち尽くしていた。手がふさがっていて，ボタンが押せない。平日の昼間の閑散としたショッピングモール。助けを呼ぶほどでもない場面。ほどなくして，高齢の紳士然とした男性が，右手の人差し指で力強くボタンを押してくれた。みれば，車いすで，発語も不自由そうである。しかし，私はこの瞬間，彼の親切に心底助かったので，「ありがとうございます」と深々と会釈をした。

そのことを思い出したのは，つい最近，樋口修吉の『ジェームス山の李蘭』を読んだときだった。戦後の日本で八坂葉介という無頼男が，中国人の李蘭という女性を愛する物語なのだが，彼女は片腕しかなかった。しかも，その理由は誰も知らない。しかし，そのことが全く気にならない。人を人として愛していたら，そういうフォルムとしてしか見えないではないか，という説得力があるのだ。李蘭が亡くなったとき，葉介は自分のほうが幸せだったと言った。

自分を助けてくれる人も，自分にとって大切な人も健常者とは限らない。しかし，健常な人は自分が助ける側で，自分が恋に落ちる人は健常な人だと思い込んでいる。

この間，小児がんの子どもたちとさつまいもを掘りにいった。大収穫で持ち運べず，コンビニから送ることにした。小学生のわが子は，さつまいもを段ボールに入れて伝票を貼る作業を放棄してしまっていた。それを小児がんの治療をした青年が見兼ねて，代わりに作業を行ってくれた。認知機能に少し困難がありそうなのに，率先して助けてくれた。私はとても感心した。「ありがとう」としか言いようがない。

小児がんの子どもたちと高尾山に登れば，ボランティアガイドの初老の男性が駆け寄ってきて，「皆さんにお目にかかりたかった。実は，私もおととし大腸がんをして人工肛門をつけている障害者なのです。でも，こうやって元気に山を登れますから」と励ましにきてくれた。大人のがんの人が小児がんの人を助けてくれる。けれども，第三者の目には，朗らかなガイドが子ども連れの団体を案内しているようにしか見えない。

外に出て，誰かのために行動したときに，病人でも障害者でもなく，その人としての輝きを放つのだとつくづく思い知らされた。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士，公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後，お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て，現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞（日本小児血液・がん学会賞）受賞。

©へるす出版